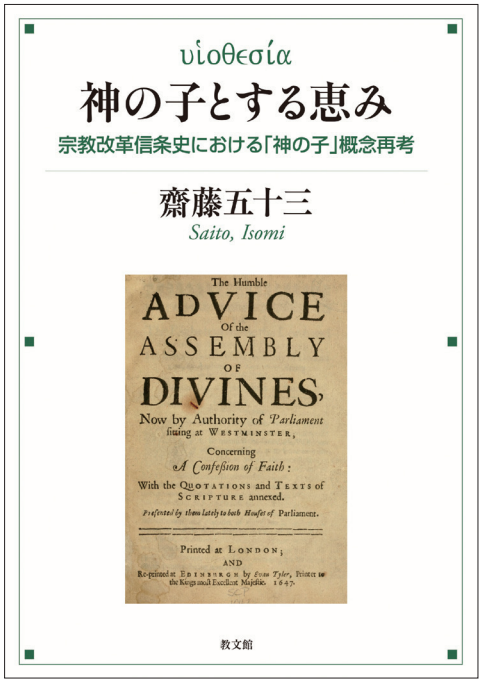
# 神の子とする恵み

## 宗教改革信条史における「神の子」概念再考

齋藤五十三❖著




パウロ書簡を起源として、救済論の一側面として発展した「神の子とする恵み」の教理。福音の家族的側面が持つ救済の意味を、宗教改革期前後の信仰告白文書を丹念に検証しながら再発見する！
歴史神学的であると同時に、牧会的視点も加味した渾身の研究。

本書を世に送り出すにあたり筆者は、本来滅びに値する者であった私たちを「子」として救う神の主権的恩恵への頌栄として、書名を『神の子とする恵み』とした。「子とする」と能動態にすれば神の恵みの「御業」が強調され、「子とされる」と受動態にすれば「子」とされる者の「立場」に焦点が当たる。「神の子」概念の基礎となるギリシア語の単語υἱοθεσία（ヒュイオセシア）の語義に照らせば、どちらの表現も可能でそれぞれに意義があるのだが、この概念が神の一方的な恵みを強調するものであることに加え、「子とする御霊」（ロマ8:15）という聖霊の呼称が定着していること、信条史において重要な役割を担っている『ウェストミンスター信仰告白』が「子とすること」と表現していることにも鑑みて能動態を採用した。このように本書名には、私たちを子とする「神の恩恵の主権性」を強調する神学的意図が込められている。　（「はじめに」より）

❖著者紹介　齋藤五十三（さいとう・いそみ）　1966年、山形県に生まれる。法政大学、東京基督神学校、カルヴィン神学校（Th.M）、アムステルダム自由大学（Ph.D）で学ぶ。現在、東京基督教大学准教授。

A5判・上製・614頁・定価6,600円（本体6,000円+税）　ISBN978-4-7642-7479-2　C3016